平成23年(2011)
阿づまの光
12月号・Decembro

五代教主作 灰釉茶盌 銘「おうな」

題字 出口直日

通巻 第５１３号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44
TEL(IP) 050-5510-9502
03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
http://www.oomoto-tokyo.com
E-mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

志(こころざし) ひろく大(おお)きくもちながら
心(こころ)こまかにくばりて生(い)きよ

出口王仁三郎聖師

初心不可忘

愛善宣教課主幹 成尾(なるお) 義(ただし)

『初心、基本、中心を忘れないように・・・』

このお言葉は、去る十月十日、本部青松会と大本青年部の新旧役員で出口紅五代教主さまにご面会を賜った折、一同に対してのべられたご教示です。

教主さまは本年四月にご就任十年をお迎えになり、この〝初心〟や〝基本〟〝中心〟が如何に大切かを再確認なされたとのことで、我々信徒、とりわけ聖地に奉職する者の心構えとして、礼儀作法はもちろんのこと、普段から真心のこもったあいさつや態度を欠かさないこと、思いやりの心を大切にすることなどをご教導になりました。

また昨年七月に執行された「沓島・冠島開き百十周年、開祖沓島ごもり世界平和祈願百五周年記念祭典」を前に、御自らも実践された『大本神諭』の全巻拝読を通じてお感じになられた心境をご紹介になり、大本開教の原点である『大本神諭』の全巻拝読を励行するようにとご教示になりました。

今年も残すところあとわずか。年があらたまり平成二十四（二〇一二）年になりますと、大本は開教百二十年の佳節の年を迎えますが、ただただおめでたい、ありがたい、嬉しい楽しいだけではなく、百二十年を迎える今だからこそ、国祖の大神さまが出口なお開祖さまに帰神され、大本がこの現界に開教した意味を、今一度、信徒一人ひとり再認識することが肝要なのだと、末席に連なりながら拝察した次第です。

来年度、大本東京本部・東京宣教センターでは、港区新橋の航空会館を会場に「出口なお・出口王仁三郎の世界を語る」と題し、年間を通じて〝公開講座〟を開催します。また東京本部を会場に、月・水・金曜の週三回午後二時から、霊界の実在や人生の目的といった大本のみ教えを外に向かって宣べ伝える〝常設講座〟と、同曜日の午後七時から、ご神前などを会場に鎮魂、拝読、浄書といった〝実習講座〟を開催します。（詳細は四頁で紹介）

新たな首都圏宣教の幕開けとなりますが、初心を忘れることなく、真心を込めて神さまに、お出会いする全ての方にお仕えしたいと存じます。

第104回「21世紀、生きがい講座」より

日本人と〝はらい〟と〝お守り〟目に見えないものを尊ぶ生活

講師 成尾（なるお） 陽（あきら）
（亀岡宣教センター
メディア愛善宣教課長）

二十一世紀に生きる君たちへ

歴史小説家の故・司馬遼太郎氏が子どもたちに向けて「二十一世紀に生きる君たちへ」という随筆を書いています。とても素晴らしい遺稿です。

「人間は、―くり返すようだが―自然によって生かされてきた。古代でも中世でも、自然こそ神々であるとした。このことは、少しも誤っていないのである。歴史の中の人々は、自然を畏れ、その力を崇め、自分たちの上にあるものとして身をつつしんできた。（中略）

二十一世紀の人間は、よりいっそう自然を尊敬することになるだろう。そして、自然の一部である人間どうしについても、前世紀にもまして、尊敬し合うようになるのにちがいない。そのようになることが、君たちへの私の期待でもある」

この文章は現在、小学校六年生の国語の教科書に採用されています。今の学校教育の現場で、司馬氏のように、「人間とは生きているのではない、生かされているのだ」「自然こそ神々である」と、先生方がストレートに子供たちに伝えることはあまりないようです。自然を畏れ、尊び、敬うという精神は、日本人が太古から受け継いできているものです。それが日本人の心であり、大本ではそれを『神性』とも言っています。神性は日本人の誰もが魂の底に持っているものなのです。

神さまの話題では、昨年『トイレの神様』という曲がヒットしました。

〝トイレに神さまがいる〟という考え方、摂理を、日本人が受け入れられたからヒットしたのであり、日本人はやはり神さまの存在を、魂で感じているのだろうと思いました。

「いただきます」と「ごちそうさま」

青森県外ヶ浜町には「太平山元1遺跡」という世界最古の縄文土器が出土した遺跡があります。一説には一万六千五百年前の遺跡とも言われています。

土器の出現が文明の出発点であると考えると、世界の四大文明（メソポタミア・エジプト・インダス・黄河）よりもはるか前に、日本文明が成立していたことになります。その後、朝鮮から稲作技術が日本へ伝わり弥生時代を迎え、自然の中で農耕をすることになったと考えられています。

私たちの先祖は古代の農耕文化から、大自然とは自分たちの生活の一部であり、自分たちも自然の一部であることを認識していました。それが神道の考え方です。

本来人間は、すべての食物を神さまからいただいています。人々はそれを神さまにお供えし、賜った恵みへの〝感謝の気持ち〟を捧げました。その後、直会として「お下がり」をいただくということを、綿々として続けてきた民族でした。

養老孟司東京大学名誉教授は、かつての日本人は、「米を食べるということは、田んぼを食べることと同じことだと考えてきた」と記しています。お米ができるということは、太陽の光、水、そして田んぼの土、すべての恵みをいただく（食べる）ことなのだと。

つまり食事そのものがすでに神事であり、古代の人々は〝食べる〟ことで、神さまと自分が一体になると考えていたのです。

『皇神にささぐるものはことごとく神より受けし御賜（みたまもの）なり』（出口王仁三郎聖師のお歌）

お供えするお米も野菜も果物も、世話をして育てることは出来ますが、人間がゼロから作り出すことは絶対に出来ません。すべて賜り物です。

ですから、出来るだけきれいに並べてお供えします。その整然ときれいに並べられたお供え物を通じて、私たちの〝感謝の気持ち〟を捧げるのです。

そうすると神さまがお光を降ろしてくださり、それをお下がりとしていただくわけです。それが神さまに対するお供えの仕方・心得です。

だから食事の前には手を合わせて「いただきます」と言うのです。

この「いただきます」は、食べ物の〝命をいただく〟ということです。ご飯でもみそ汁でも漬物でも魚でも、すべての物に命があります。私たちはその命を、食事を通していただき、自分たちの命をつないでいるのです。

そういう謙虚な感謝の気持ちが表れて「いただきます」という言葉になっています。これこそがまさに、〝命のリレー〟ではないでしょうか。

そして食べ終わったら「ごちそうさま」と感謝します。漢字では「御馳走様」と書きます。

作る人が食べる人のことを思って、一生懸命駆けずり回って食材を集めて作ってくださった。それに対し〝ありがとうございました〟という感謝の気持ちを込めて「ごちそうさま」と言うのです。

「いただきます」と「ごちそうさま」は、それほどに尊い言葉であるということです。

生かされている意味

そこで、多くの動植物の命をいただいて生活する私たちは、何のために生かされているのかを考えてみる必要があります。

ファッション評論家として活躍するピーコさん（66歳）は、44歳のときに悪性黒色腫という癌を患い左目を摘出されました。

それまでのピーコさんは、とにかく楽しいこと、おいしいものを食べたり、宝石を集めたりすることを目的に生きていたそうです。

ところが病気になって初めて、自分は一人で生きているのではなく、多くの人に支えられて生かされていることを自覚したそうで

す。

そうした時、ある医師との出会いから、ピーコさんのファンだという末期癌のご婦人をお見舞いされることになりました。

意識がもうろうとした状態の患者さんだったのですが、ピーコさんのお見舞いに驚かれ、ベッドから起き上がろうとされ、ご家族の皆さんも涙を流して喜ばれたそうです。

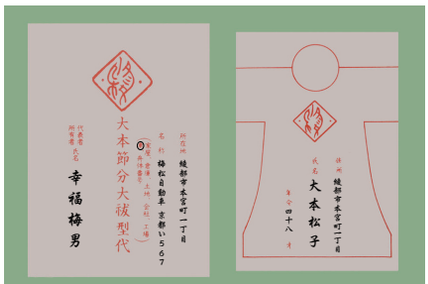
ピーコさん自身、癌を患ったけれども自分はまだこうして生きている。やはりそこに自分が生かされている意味があり、役目があるのでは？　と悟られたそうで、それからは依頼された仕事はもちろん、病院へのお見舞いなども断らずに出掛けているそうです。

節分大祭人型大祓神事

大本では、人間一人ひとり生かされていて、それぞれに使命があると教えられています。

それぞれに使命があるわけですから、与えられたものに対してどれだけ前向きに生きて行くかが大切です。

そうした中にも、現実世界で生活をしていくと、予期しない災いや、目に見えない災禍が起こる場合がありますので、そういった災いが起こらないように、お祓いをする必要があります。



人型（左）と型代の用紙

お祓いとは一般的に「神に祈って、罪や穢れを取り除くこと」です。

罪には、「積み重ねること」「包み隠す」という意味もあります。穢れとは「気が枯れる」「消極的になる」ということも指します。それらを含め、災禍を取り除くことがお祓いです。お祓いと聞いて、皆さんが一番に思い浮かべられるのが、厄年の〝厄払い〟ではないでしょうか。

体のリズムが変わる年齢とか、いろんな役がたくさん回ってくるからということでお祓いをされる習慣がありますが、出口王仁三郎聖師は、厄年とは「神さまから新たなお役をいただく年」と説いています。

『思わざること次々に起これども善意にとれば力とぞなる』（出口王仁三郎聖師のお歌）

言い方を変える、大本では「のり直す」と言いますが、これも一つのお祓いの向かい方ではないかと思います。

祓うとは清めることです。清めるためにはいろいろなものを使います。神社にはつくばいがありますが、ここでは水を使います。さらに祭典でのお祓いには大麻（おおぬさ）を振ることによってお祓いされますし、火打ち石による切り火、お塩、仏壇の線香の香りと煙、神楽舞いの鈴や笛の音などもお祓いとして用いられます。

中でも特にその力が強いとされているのは、人間が発する〝言霊（ことたま）〟で、その中でも一番清らかな言霊が祝詞なのです。

毎日祝詞を奏（あ）げていると、日々少しずつ清められているわけですが、一年に一度は、きちんとした大掃除をした方が良いでしょう。そこで、大本では聖地・梅松苑（京都府綾部市）で「節分人型大祓神事」を執り行っています。

節分とは旧正月のことで、旧年と新年を分ける節ということです。昔からそれにあわせてお祓いをする習慣が日本ではあったわけです。

お祓いを受けたい人の住所と名前を用紙に書きます。これがその人の型になるので「人型」といいます。

また、人だけではありません。その人が住んでいる家屋、使っている車や自転車なども同様に代わりの型として用紙に記入します。こちらの用紙は「型代」といい、この「人型」と「型代」を使ってお祓い、潔斎をさせていただきます。

大本節分大祭では三つの潔斎神事が行われます。

まず天地六合、つまり全大宇宙すべてをお祓いする「大潔斎神事」。次に世界の国々をお祓いする「中潔斎神事」。そして、各個人や家、車、田畑などをお祓いする「小潔斎神事」の三つです。

その小潔斎神事では、人型に書かれた一人ひとりの住所・氏名などを祭員らが祈りながら読み上げて、素焼きの壷に納めます。それを瀬織津姫（お祓いを司る祓戸四柱大神の一神）に扮した女性たちが、市内を流れる和知川まで運びます。そこで清らかな言霊である祝詞を奏上する中、清流に流してお祓いさせていただきます。

ただ紙に書いたものを川に流して、それで終りではなく、一生懸命に祈りを捧げ、お祓いの行事をさせていただくことによって、一年間で知らず知らずの内に犯した罪や穢れを祓っていただけるのです。

それから「お守り（祓いの証）」をいただきます。

小さい方は財布とか免許証とかに入れて、お祓いを受けた証（あかし）として携帯します。そして、家や車などには型代用の大きな祓いの証を掛けます。

祓いの証はまさに、〝この節分でお祓いを受けました〟という印なのです。

神さまとの真釣り合わせを

大本で〝祭〟とは、神さまと人とが〝真に釣り合うこと〟と教えられています。

例えば、子どもが「おとうさん、これ」と言って手作りの〝お守り〟を手渡してくれたとします。

お父さんは嬉しくて、「あぁ、ありがとう……」と言って大事にします。その〝お守り〟には、子供がお父さんを慕う思いがつまっています。また父親は、そのお守りを見るたびに、子供に対する深い愛情が湧きます。この時、〝お守り〟を通して、お父さんと子供の〝心の真釣り合わせ〟が出来ているわけです。

同じように、神さまと人との真釣りあわせの証が、お守り（祓いの証）であるとも言えます。ですから私たちは、神さまに向かう気持ち、神さまのご守護をいただくという〝思い〟を持つことが、とても大切ではないかと思います。

私たちは、「生かされている」という大前提に立ち、日本人の精神性の高さ・誇りを忘れず、神さまとの真釣り合いを心がけながら尊敬し、それぞれの使命を自覚して、前向きに生きていきたいものです。

東光苑秋季大祭

東光苑秋季大祭・新穀感謝祭・七五三詣りは十一月十三日、午前十時三十分から、斎主・出口出口文営大本楽天社代表のもと執行され、三百九十五人が参拝した。

祭員は関東教区各機関の祭務部長、少年少女祭員は東京主会の吉田英里香さん、土方清美さん、伊藤奏流くん、伶人は宮咩会関東支部、大本神諭拝読は佐藤榮栃木主会長、添釜は宇野社中のみなさんが担当した。

祭典後、浅田秋彦東京宣教センター長があいさつに立ち、天恩郷・新大道場講堂の完成奉告祭（十二月四日執行）についてや、来年度開催する公開講座と常設講座について解説。「開教百二十年は大本の教えを世界に発信する時節であり、信徒一人ひとりが〝み教えの実践リーダー〟になるよう活動しなければならない」とのべた。

浅田センター長より七五三詣りのお子さんたちに千歳飴が手渡された

次いで、七五三詣りに参拝されたお子さん九人と保護者を紹介され、浅田センター長から千歳飴が手渡された。

続いて出口文営大本楽天社代表があいさつをのべ、「大本と芸術」と題して木村重信大阪大学名誉教授が「京都新聞」に寄稿されたことや、東日本大震災が発生しての所感を紹介。「大震災を通じて改めて真（まこと）や大和魂といった開祖さまの教えを考えさせられた。そしてそれと同時に、皆の力が鏡となって心豊かに暮らせる『みろくの世』へと向かっていると確信している」とのべられた。

その後、宮咩会関東支部の皆さんによる八雲琴「振放曲（ふりさけふり）」と、関東教区青年部員による役割拝読「高照山」が奉納された。

直会後、二階講座室では直心会神奈川連合会によるバザーなどが行われた。

第105回「21世紀、生きがい講座」

第一〇五回『二十一世紀、生きがい講座』は十一月十六日午後七時から九時まで、東京本部講座室において、森良秀東京宣教センター次長を講師に「生きがいを求めて」と題して開催された。参加者は四十三人（内、一般十七人）。

講座では、心と体の関係や日本人の精神性の高さ、想念のコントロールなどについて解説。「根源神への祈りと感謝の気持ちを大切にすることで、霊魂の浄化をより深めていくことができる」と説いた。

参加者からは「涅槃静寂、心の静けさ、思いやり、心の持ち方の大切さを感じました。（五十四歳・一般・男性）」などの感想が聞かれた。

大本公開講座「出口なお・出口王仁三郎の世界を語る」常設対外講座「講話」と「実習」の開催について

大本東京本部・東京宣教センターでは、平成２４年度教団方針重点施策の中で、首都圏の対外宣教活動および愛善運動を積極的に推進し教勢を拡大する一環として、大本公開講座「出口なお・出口王仁三郎の世界を語る」と常設対外講座（講話と実習）を開催します。

記

来年度予告

◎大本公開講座「出口なお・出口王仁三郎の世界を語る」

開催日時　毎月第３水曜日　午後７時～８時３０分
場　所　航空会館（港区新橋１丁目１８－１）
参加費　１，０００円　※１２月１日改定

◎常設対外講座「講話」と「実習」

開催曜日　毎週：月・水・金曜日　　参加費　無料
午後の部「講話」午後２時～３時３０分
夜間の部「自習」午後７時～８時３０分
※ ただし、毎月第３水曜日の「夜間の部」は休講とします
期　間　平成２４年１月から１２月まで
場　所　８階ミーティングルーム（講話）、３階教務室（実習）
内　容　〇講話：月曜日『人生の目的』
水曜日『人生を豊かに生きるために』
金曜日『あの世を知ってこの世を生きる』
〇実習：拝読会・輪読会・鎮魂・浄写など（各曜日共通）

東光苑祭典・行事予定

12月

東光苑月次祭・市杵島姫命例祭
11日（日）午前10時半
開祖聖誕祭（175年）
16日（金）午前10時半
第106回「21世紀、生きがい講座」
講題 世界に活動する大本
講師 浅田秋彦（東京宣教センター長）
21日（水）午後7時～9時
出口日出麿尊師二十年祭
25日（日）午前10時半

平成24年1月

新年祭
1日（日）午前7時
年賀交換
1日（日）新年祭後～午後5時
2日（月）午前9時～午後4時
3日（火）〃
七草粥
7日（土）午前10時半～午後3時
東光苑月次祭
8日（日）午前10時半
「出口なお・出口王仁三郎の世界を語る」
講題 大本の神示と世界の将来
講師 森 良秀（東京宣教センター次長）
18日（水）午後7時～8時半
聖師毎年祭（64年）
19日（木）午前10時半

※「常設対外講座」は上記を参照ください